

勝田範彦 ホンモノの証明

- [ルートガイド]
○サーキットステージ
SS1 レイクサイド:1.5km
SS2 外周路:2.2km
SS3 メインコース:4.5km
SS4 レイクサイド:1.5km
SS5 外周路:2.2km
○サービス
SS6 レイクサイド:1.5km
SS7 外周路:2.2km
SS8 メインコース2周:9km
SS9 連絡道路:3.2km
○サービス
SS10 外周路:2.2km
SS11 連絡道路:3.2km
(SS11はキャンセル)



ターマック2戦完全制覇!

雨、風、霧という悪天候のなか行われた今回のラリー、GDBインプレッサを駆るターマックマイスター西尾雄次郎と遊城進んだエゴ胃の奴田原文雄の対決が注目を集めたが、サーキットステージを最速で駆け抜けたのは、前戦で全日本Cクラス初優勝を遂げた勝田範彦だった……。



そのサーキットステージでは、毎年西尾雄次郎と奴田原文雄が激しくタイムを削り合ってきた。だが今シーズンは西尾はGDBインプレッサに乗り換え

「まさか2連勝が飾れるとは、思ってもいませんでした。今回から新型(GDB)インプレッサに変更し、軽量化も十分ではなかった。熟成にはほどよい状態だったんですよ。それで、序盤はペースが上がらず、サーキットステージの後半になってようやく攻めることができた。ヘビータイトでもダンロップ・フューリーミューラーD93Jが非常に高い性能を発揮してくれた。それを機に攻めて攻めたことが最終につなごうかと思いましたが、悔しいです。ターマックステージを2連勝、出陣までです。悔しいくらいです。」

全日本ラリー4輪制覇部門は、シリーズ準優勝のターマック2戦Aクラスプリンツラリーを逃したが、前戦MC Aで全日本初優勝を挙げた勝田が2連勝。シリーズ2位に躍進し、チャンピオンの可能性も見えてきた。

A/C Kは二戦連年、オートボリス内の施設を使ったサーキットSSステージと、周辺林道でのハイアペレリョラリーセッションの構成が定着している。今シーズンも、その設定は変わらなかったが、サーキットステージには、新たにメインコースの外周を走る連絡道路でのSSが加えられた。これによりサーキットステージはメインコース、レイクサイドコース、外周路、連絡道の4コースを使用しての11SS(33回)が実施された。後半のハイアペレリョセッションは、従来の悪クラベル路ではなく、ターマック林道に変更され、減速も1秒0.5以内、かつ、事前にJAFの指導によりアペレリョが上げられている。このため、勝負の大半はサーキットステージに集約されることになる。



全日本ラリー一選手権4輪駆動部門 [第3戦]

ACK SPRING RALLY 2001

■4月21~22日
大分県オートポリス周辺360km
[3ステージ10SS33.2km]

Photo: Kengo Kanchide (金秀研吾)
Report: Yutaka Murai (村井 豊)



C Class

たことでファルケンの補正タイヤR S・V04という強力な武器を得た。ラリー前の下高井は西尾健治、ところが20台のエントリーラントが集まったオートポリスには、無情の雨が激しく降り注いでいた。このためスタート前のパドックは、タイヤチェーンの詰りで持ちこたない、各タイヤメーカーのエントリーによる、ハイドロブレーキングが起きるほどの水たまりが発生しなければならぬ。ドライバーのほうからタイヤが出るのだが、水たまりがでると簡単にグリップが低下する。タイヤ交換はSS55終了後のサービスのみ。その間に天候が急変すれば、勝負は終わってしまう。そして迎えたサーキットステージのスタート。後援タイヤは、アドバンがA048、ダンロップは93Jが多く、一部はD01Jで勝負に出る。西尾はワエト周をチョイスした。SS55アタックが始まると、アドバン勢の優位が目立った。萩田原がSS1で2位に1秒差のベストタイムをマークしたが、2番手グループにも田口幸史、大嶋治夫、松井幸夫、相澤忠宏らアドバン勢が名を連ねた。さらに快進撃は止まらない。萩田原が外周路、メインコースで連続ベスト、続くレイクサイドで田口、外周路を萩田原、何とも連続ベストタイムで序盤を完全制圧してしまったのだ。A048は、ワエト性能も物足りないのドライタイヤに比べていいです。から料、それに路面温度もマッチしていたのでしよう」と萩田原は笑顔を浮かべ、毎年、僅差で西尾に先行されるたびにその差を縮めてきただけに、このアタックも西尾は彼の気分を相澤も抑えさせたはずだ。逆にレイバル西尾のペースが上がらない。SS1で4秒もの差を付けられるも、1秒、3秒、1秒、1秒とベストに遅れていた。

「特にトラブルがあまりわけじゃない。いつもどおりの走りです。強張っているだけでね。ペースに乗り切れていない。後半になってやっとタイムが出てきたが……」と表情を曇らせた。この順位を整理しておこう。トップの萩田原は、田口に1秒差、大嶋がつけたアドバンが1秒差、その1秒差に松田、西尾は田口に3秒差の5番手だ。1秒差で相澤が続く。4秒遅れて好タイムを挙げながらSS55メインコースでスピントした松井が続く。今回の主役萩田原は、快進撃を続ける萩田原にまたこの時点で高いついていくのがやっとの状態です。9秒差となり「調子が合っていないよ……、オーバーリッチ(速すぎる)。気分なんです。足もドライセッティングは出ているが、ワエトはやっているんで怖くて……」。全期、攻めきれない」とマシンの調整に忙しかかった。

サーキットセクション後半は、気温が上がり路面が軒乾し始めてスタートを助えた。序盤を制したアドバン勢がやはり序盤で、SS56レイクサイドを萩田原がベストタイム、1秒差で田口、大嶋、松井、相澤がSS57と同じ順位となった。SS57の外周路はようやく西尾の走りが見え始めてベストをマークした。差が縮まらないと嘆くように、萩田原を僅差に上位陣が1秒差でタイムを並べた。萩田原のマージンも1秒。萩田原が復活の今季初優勝に向けて、最後の展開かと思われたところからヤシズンの萩田原はツキがない。続くメインコースを走る直前の勝負でコースをオーバードライブに陥れられ、ベストタイムの大嶋に1秒差の差を付けられ、それまで続いた差を吐き出し、大嶋が久々のリーダーに躍り出た。それはかりか、1秒差に田口、3秒差に松田、4秒差に西尾と上位陣との差も狭まった。そして、ついに主役の登場だ。セッ



4000インプレッサとなり、ファルケン製の競技タイヤR15・V104を得たターマックマイスター西尾隆次郎だったが、今回は最後まで乗り切れず2位止まり。



今回はアワシの4048がトップとなり、松井は、コンスタントにタイムを出しながらも5分33のスピードが響いて7位。



好調の山口幸彦が4位。サーキットスターは和田隆の1秒遅れて4位。ラリー展開でコンマを伸ばしたが4位でゴール。



序盤3連勝のベストで好調な走り出しを見せた和田隆次郎が4位。5分33のオーバーヒートで失速しタイムダウンし3位に。



石田正光のフルカウンターでのドリフトシーン。しかし石田はタイヤ温熱に失敗。いいところがなく8位でラリーを終えた。



5分33タイムは2番手1分がマツト。積極的な走り出しでインプレッサはタイムが伸び悩む8位。スタートでの走りに期待がやかる。



5分33までリーダーに立った大崎光典。だが約2分55で和田隆に抜かれて3位。ラリー展開の成長が響き5位に終わった。

タイミングが決まらず苦戦していた藤田が、今回初めて使用する速達車でのSSRでブツもぎりの走りを披露した。コニは競技中に低速で走る下見しかしてない。みんな知らないコースと同じ、多分抑えるだろうと、だから、逆に勝負をかけた。タイヤを傷じて、自分としてもオーバーペースと思えるくらい攻めました。というように、2番手藤田を4秒も引き離すベストをたたき出したのだ。これで藤田は一気に6秒差のトップに浮上する。2番手争いも西尾、大崎が和田隆をとらえ、田口がその1秒差の大接近戦となる。この時点で藤田により5.511のキャンセルが決まり、勝負は5.510だけ。ここでも藤田の速さが光って連続ベストで締め、気になると2番手争いは西尾が1秒遅れて、和田隆、大崎が3番手、1秒差に田口という展開となった。以降は、藤田が後半追い上げて6秒差、松井、大崎が4秒差のオーダーだ。

結局、後半2本でトップを奪った藤田は、4分58秒に6秒差、ハイアベセクションを残すが、冒頭で想定した設定のため、実質的に12秒の安全なマージンを得た。サービスタイムもものように先陣に立ってマシンを調整しながら、出雲までです。サーキットは毎年タイムが出なくて、ライン取りが林道コースとは全く違うので慣れないんです。ことしも西尾さんにこれだけ聞かれるも、なるべく差を縮めようという目標だったんです。ただ今回は、他の選手の走りについて研究して、気持ちを抑えて丁寧に走るように心がけた。それが良かったんだと思う。とやや余福が出たように感じられた。一方のライバルは、この展開にお手付け状態。結局、最後まで乗り切れなかった松井は、全コースでベストタイムが取れたんやけど、今回は1コースだけ(DS)。これでは勝てないよね。コースが違う



平塚忠博vs島田雅道の ストーリー対決

A Class

Aクラスは、前戦エンジントラブルで痛い道を踏としたターマックマイスター島田雅道が巻き返しを計るべくスタート前から気合十分。迎え撃つ000のストーリーは、チャンピオン島田が「サーキットは初心者マークからやっとなげ出した程度ですから、あまり期待しないでください」ということで、今回は平塚忠博が迎撃する。同じストーリーもダンロップの両者は、序盤から激戦を展開した。まず、レイクサイドをトップランナーの小野寺が8秒でクリアすると、平塚が1秒更新、さらに島田が1秒更新するベストをたたき出す直前に遅れた平塚は、すぐに外周路で追いつき、メインコースは島田が1周で2秒平塚、小野寺を引き越した。島田が前輪の周りを滑らす展開かと思われたが、ここから島田がらしくない変りに変身してしまうのだ。「ウェットのサーキットは苦手なんですよ。それに外周路や作業道のようなコースもドライなら攻められるけど、ウェットで滑りやすくなると思うし、デールを出したときのコントロールは平塚選手のほうが上」と自信を上げてしまった。結局、平塚がさらに7秒更新するベストタイムをたたき出して、貴い下がる島田に8秒差を付けてサーキットステージを制した。ハイアベセクションは途中遅れが出て小野寺有利になったが、「ハイアベでは読めきれない。サーキットの差が大きくなりました」と悲憤を認め、結局平塚がブッパりで2勝目、シリーズリーダーに躍進した。



B Class

鎌田豊が余裕の勝利



Bクラスは、ライバル同士の大激戦と水戸選手がサーキットステージで格次いでリタイア、水戸はマシンを大破し「あのクルマをどうしよう」と心配するほどの壮絶なクラッシュで戦列を離れた。こうなると、鎌田豊の決勝ムードが支配した。違う陣地北久はタイヤがA048のS Sしかなく、溝が浅っていため思い切った走りができなかったと、2SSでベストタイムをマークし下り下がったが30秒もの大差が広がってしまう。3番手には、今季から自に移行して「大減量中」のドスコイ水野が6秒差。結局、ハイアベで「最終ミス、1分の計算間違い」をして33秒も食いながら鎌田が差を2秒だけ切り今年初優勝を飾った。次戦は、丹羽和志との対決が見物だ。

から何ともいえないけど、全体的にベイスが上がっているんだと思うね。ハイアベは乗れてしまうやろ、補正勝負じゃ、差を縮めるところが無い」といふ。西尾がいうように、レイクサイドを例に取ると、去年とは逆走になるが、去年のベストが67秒で今年70秒、ヘビウエットを差し引くとベイスアップしているといえそうだ。

アクションに入っても最少減点で抑え続けた。結局、田口が2点で抑え、4点と多めの減点を受けた大崎を逆転し4位に浮上し、柳澤が不運にもリタイアした以外は大きなドラマが起きず、鎌田が3点、西尾が1・5点、飯田原が2・5点でクリア。サーキットステージでの順位そのままフィニッシュした。シリーズは陣盤3戦を終えて西尾が240点でトップを決定。2連勝の鎌田は200点で続く。次戦は鎌田が「ことしの真価を問われるラリーですね」と気合を入れるひえつきラリー。グラベル初戦となりエボII、GDBの対決がまた楽しみだ。

順位	ドライバー	第1戦 2/24 北尾隆徳	第2戦 3/14-15 大崎	第3戦 4/21-22 大崎	第4戦 5/10-11 飯島	第5戦 6/13-14 北尾隆徳	第6戦 7/19-20 北尾隆徳	第7戦 8/16-17 飯島	第8戦 9/13-14 北尾隆徳	第9戦 10/11-12 飯島	得点
1	島田雅道	10	10	10	10	10	10	10	10	10	90
2	平塚忠博	9	9	9	9	9	9	9	9	9	81
3	小野寺	8	8	8	8	8	8	8	8	8	72
4	水野	7	7	7	7	7	7	7	7	7	63
5	飯田原	6	6	6	6	6	6	6	6	6	54
6	西尾	5	5	5	5	5	5	5	5	5	45
7	田口	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36
8	柳澤	3	3	3	3	3	3	3	3	3	27
9	大崎	2	2	2	2	2	2	2	2	2	18
10	飯島	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
11	北尾隆徳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	大崎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	飯島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	北尾隆徳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15	大崎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16	飯島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17	北尾隆徳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	大崎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	飯島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	北尾隆徳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0